

かわさきパラムーブメント推進フォーラム
第1回推進会議 議事録

日時 平成27年10月19日(月) 18:00~20:00

会場 川崎市役所 本庁舎 特別会議室

出席者

委員長 福田市長、成田委員長

顧問 中森顧問、日々野顧問

委員 遠藤委員、大塚委員、小倉委員、菊地委員、五島委員、島委員、杉山委員
瀬戸山委員、土岐委員、中澤委員、中村委員、北條委員、山田委員、
横島委員、ロー委員、田中委員代理(須藤委員の代理)

オブザーバー JOC 中森氏

事務局 滝峠総合企画局長、唐仁原都市経営部長、久万企画調整課長、
山本企画調整課担当課長、佐藤企画調整課担当係長

議題 開会

市長あいさつ

委員紹介、事務局紹介

設置要綱の確認

議事

- (1) 2020東京オリンピック・パラリンピックに向けた本市の取り組みについて
- (2) かわさきパラムーブメント推進フォーラムについて
- (3) その他(取り組み提案依頼、次回会議等の開催等)

公開・非公開の別 公開

傍聴者 5名

議事

開会

(山本課長)

ただいまから、かわさきパラムーブメント推進フォーラム第一回推進会議を開始させていただきます。私は、総合企画局都市経営部企画調整課担当課長の山本と申し

ます。

はじめにお断りさせていただきますが、今回の会議は公開とさせていただいておりますので、マスコミの取材や傍聴を許可しておりますことを、あらかじめご了承くださいたいと存じます。傍聴者の皆様には、入り口でお渡しいたしました遵守事項をお守りいただけますよう、よろしく願いいたします。また、会議録の公開に関してでございますが、公開に際しましては、発言者の氏名も含めて公開させていただきたいと存じますが、いかがでしょうか。それでは、公開にあたりましては、記録が作成でき次第、各委員の方の了承をいただきまして、公開させていただきたいと思っております。なお、記録の作成をお願いしております、民間会社の方も同席させていただいておりますことを、あわせてご了承くださいたいと存じます。

それでは会議に先立ちましてお手元にお配りしました資料のご確認からさせていただきます。

- 会議次第
- 委員名簿
- 席次表
- 資料1 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けたかわさきプロジェクト外部連携会議開催運営要綱
- 資料2 オリンピック・パラリンピック東京大会に向けた本市の取り組みについて
- 資料3 かわさきパラムーブメント推進フォーラムについて
- 参考1 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けたかわさきプロジェクト取組方針
- 取組提案票

市長あいさつ

(山本課長)

はじめに福田市長から皆様にご挨拶を申し上げます。市長、お願いいたします。

(福田市長)

皆様こんばんは。皆様方には大変お忙しい中、かわさきパラムーブメント推進フォーラムの顧問、委員にご就任いただきまして本当にありがとうございます。前回の東京オリンピック・パラリンピックからすでに50年以上が経過し、私を含め、当市市役所の職員が誰も前回のオリンピックに携わっていないということとして、2020年のオリンピックをどのように迎えるかということを試行錯誤しながら、今検討を進めているところでありますけれど、「かわさきパラムーブメント」ということを基本にして、新しい川崎のレガシーをつくろうと頑張っているところでございます。今年になって、JOCさんとパートナーシップ都市協定というものを結ばせていただいて、様々なパラリンピックに関連するようない

ベントも川崎市内で進めさせていただいております。

今年川崎市が始まって91年目を迎えますが、川崎ができたのは関東大震災が起こった翌年で、まさに震災の復興のときに川崎ができています。そして産業が栄え、終戦で焼け野原になったところから復興し、工業都市として栄えたところに公害問題が発生し、それを乗り越えてきたという風に、数々の困難試練があった中でも、何度でもピンチをチャンスに変えてきた。そういうチャレンジスピリットにあふれた都市だと思っております。

そういった意味で、今回お集まりいただいている皆様には、何らかの形で川崎に携わっていただいている方、あるいは各界で非常にチャレンジングな取組をされている方に顧問そして委員になっていただいたということで、ぜひ新しいレガシーづくりに皆さんの知恵を拝借して、素晴らしい川崎のまちづくりに活かしていきたいという風に思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

私とともに共同委員長を務めていただいております成田真由美さんは、皆さんよくご存知かと思いますが、川崎が誇るパラリンピアンでございまして、川崎市市民文化大使としても御活躍いただいております。そこでぜひ成田さんにご就任いただきたいとお願いさせていただきました。そして、また大変心強いことに、JOCの事務局長の日比野さん、JOPの事務局長の中森さんのお二人に顧問をお引き受けいただき、JOCの中森さんにもオブザーバーとして参加をいただけるということで、川崎パラムーブメント推進フォーラムといたしましては大変ありがたく思っております。

長期間になりますけれど、皆様どうぞお知恵をいただきたく、よろしく願いいたします。

委員紹介

(山本課長)

ありがとうございます。それでは次第の2に移らせていただき、名簿の順に本日のご出席の皆様のご紹介をさせていただきます。

<参加者>

- 共同委員長 川崎市長 福田 紀彦
- 共同委員長 パラリンピアン川崎市文化大使 成田 真由美 様
- 顧問 日本パラリンピック委員会事務局長 中森 邦男 様
- 顧問 日本オリンピック委員会事務局長 日比野 哲郎 様
- オブザーバー 日本オリンピック委員会広報企画部長 中森 康弘 様
- 委員 株式会社サイボーグ代表取締役社長 遠藤 謙 様
- 委員 株式会社オーリアル代表取締役 大塚 訓平 様
- 委員 公益財団かわさき市民活動センター理事長 小倉 敬子 様
- 委員 特定非営利活動法人高津総合型スポーツクラブ SELF 副理事長 菊地 正 様

- 委員 公益財団法人川崎市スポーツ協会事務局長 五島 三津雄 様
 - 委員 一般社団法人チャレンジド・クリエイティブラボ代表理事 島 桜子 様
 - 委員 株式会社ぐるなび執行役員 杉山 尚美 様
 - 委員 特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所代表理事 須藤 シンジ (欠席) 様
代理：同研究所ディレクター 田中 将大 (まさひろ) 様
 - 委員 有限会社オフィスプライヤ代表取締役 瀬戸山 正二 様
 - 委員 株式会社チッタエンタテインメント取締役 土岐 一利 様
 - 委員 株式会社バリアフリーカンパニー代表取締役社長 中澤 信 (まこと) 様
 - 委員 株式会社フィード代表取締役社長 中村 建治 様
 - 委員 公益財団法人川崎市文化財団理事長 北條 秀衡 (ひでえ) 様
 - 委員 川崎商工会議所会頭 川崎市国際交流会会長 山田 長満 (おさみつ) 様
 - 委員 公益財団法人川崎市身体障害者協会事務局長 横島 正志 様
 - 委員 特定非営利活動法人ママプラグ代表 ロー 紀子 様
- <欠席者>
- 委員 川崎フロンターレプロモーション部長 天野 春果 (欠席) 様

事務局紹介

(山本課長)

次に事務局のご紹介をさせていただきたいと存じます。次ページをご覧ください。

- 事務局 総合企画長 滝峠 雅介
- 事務局 総合企画局都市経営部長 唐仁原 晃
- 事務局 総合企画局都市経営部企画調整課長 久万 竜司
- 事務局 総合企画局都市経営部企画調整課担当係長 佐藤 園子
- 事務局 総合企画局都市経営部企画調整課担当係長 山崎 功貴

(山本課長)

なお、この会議の運営につきましては、株式会社アサツァー ディ・ケイ様に支援業務を委託しております。東京 2020 オリンピックパラリンピックプロジェクト本部部長 多田俊明様です。

(多田本部長)

アサツァー ディ・ケイの多田と申します。事務局のお手伝いをさせていただきまして、誠にありがとうございます。川崎市様にはドラえもんミュージアムをはじめ大変お世話になっております。また今回事務局という 非常に大変大切な役割を仰せつかり、頑張っ取り組ませていただきますので、何卒 ご指導のほどお願いいたします。

設置要綱の確認

(山本課長)

次に、次第 3 の設置要綱の確認に移らせていただきたいと思います。お手元の資料 1 の「2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けたかわさきプロジェクト外部連携会議開催運営等要綱」をご覧いただきたいと思います。本会議は、2020 年東京オリンピック・パラリンピック に向けた市内の推進体制として設置いたしました「かわさきプロジェクト推進本部」の外部との連携を目的とした懇談会として、この要綱に基づいて開催いたします。会議のねらいや検討の進め方の詳細につきましては、後ほど議題 2 でご説明させていただきます。

なお、本会議の座長につきましては、委員長の福田市長が務めます。ご了解のほどよろしくお願いたします。福田市長、議事進行をよろしくお願いたします。

各委員あいさつ

(福田市長)

はい。それでは先ほど事務局から皆さんのお名前をご紹介させていただきましたが、議論に入る前に東京オリンピック・パラリンピックに向けた皆さんの思いやこの会議に期待することなど、大変恐縮ですが、1 分程度でお言葉をいただければと思います。

それでは、はじめに私と共同して委員長を務めていただきます成田委員長から、お願いたします。

(成田委員長)

はじめまして。成田真由美です。私は川崎の多摩区に生まれまして、今年 45 歳になりますけれど、今もそこに住んでおります。地元の川崎市の皆さんに支えていただき、4 回のパラリンピック出場をすることができました。また今、2020 東京オリンピック・パラリンピック組織委員会としてもお仕事をさせていただいています。地元の川崎で盛り上げていければ大変嬉しいので、皆さんと力を合わせて大きな動き、大きなものにしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

(JPC 中森顧問)

日本パラリンピック委員会の中森といいます。1984 年のパラリンピックから水泳のコーチ、監督、団長、副団長と務めさせていただいて、水泳の監督時代はシドニーですか、成田さんと閉会式で旗を持って行進するという非常に印象的な思い出があります。向こうにいらっしゃる JOC の中森さんとは縁がないんですけど、ひょっとしたら昔つながっていたかもしれない。我々日本障がい者スポーツ協会・日本パラリンピック委員会は、2030 年のビジョンというものがあって、それを目標に動いております。その中で一番重要なことは、障害のある方が自分の住んでいる地域でスポーツに参加できる環境をつくるということと、パラリンピック等で日本の代表選手がたくさんのメダルが取れる、強化の環境が進んだ世界を作ろうということで、その最終的な形というのは、地域におけるスポー

ツを通した共生社会の実現、障害のあるなしに関わらずスポーツを通して楽しく生活しながら日本のいろいろなものに貢献できるような世界をつくりたいと思ってやっております。よろしく願いいたします。

(日比野顧問)

オリンピック委員会の日比野でございます。日頃より JOC の活動にご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。今回は、このフォーラムの顧問ということで皆様と一緒に参加させていただきます。ご存知のように招致が決まりまして2年が経ちましたけれど、決定以降、全国の多くの自治体が 2020 年対策室ですとか準備室ですとかを設置され、皆さんオールジャパンでオリンピックを迎えようとされています。こちらの川崎市におかれましても、私どもとパートナーシップを締結しまして、選手の就職支援事業の関係でアスナビ事業というものをやっておりますけれども、その説明会をさっそく川崎で開催していただいたり、積極的にオリンピックムーブメントを推進していただいていることに大変感謝を申し上げたいと思います。引き続き 2020 年に向かって皆様のご協力をお願いしたく、どうぞよろしく願いいたします。

(中森オブザーバー)

日本オリンピック委員会の中森と申します。私は本日オブザーバーということで参加させていただいたんですが、実は川崎市とパートナーシップ協定を結ぼうと福田市長に直に私から申し上げまして、この 3 月 30 日に締結させていただくことができました。単なる 2020 年の合宿とか練習会場とか、そういうことだけではなく、2020 年を超えた末長いオリンピック・パラリンピックとの結びつきを、ぜひつくって欲しいと申しあげましたところ、市長は本当に素早い反応をしていただきました。これからもオリンピック・パラリンピックと川崎市の結びつきを より強固なものにしていただけるよう、お手伝いをさせていただきたいと思います。

(大塚委員)

株式会社オーリアル、そして NPO 法人アクセシブル・ラボの代表を務めさせていただいております大塚訓平と申します。車椅子に乗っておりますので、座ったままで失礼させていただきます。私自身は、6 年前に事故によって脊髄を損傷し、車椅子で生活するようになりました。まだ 6 年ですので、初心者マークをつけて車椅子に乗っているようなものかもしれませんけれども、これまで数多くの障害を持っておられる方に接してまいりました。その中で見えてきたのは、住環境の整備、外出環境の整備、そして就労関係の整備と、この 3 つの観光整備が重要だろうと思っておりまして、会社では住環境整備、そして NPO 法人では外出環境の整備をやらせていただいております。今メインは企業向けのコンサルティングで、一番大きいところでは全日空さんのコンサルティングをやらせていただいております。川崎市さんで自分の実力をしっかりと発揮して、魅力あるまちづくりに力を尽くせればと思います。

(小倉委員)

公益市民財団法人かわさき市民活動センター小倉と申します。私は 20 数年前から海外駐在をしており、その関係で川崎の外国人支援を 20 数年やっております。それから、ボランティアの市民活動センターのほうではボランティアのいろんなサポートをしており、国際都市川崎として、いろいろな場面でおもてなしのサポートができるのではないかと思っております。

(菊地委員)

川崎市高津区でスポーツ活動をやっております、SELF の菊地と申します。私ども、今年度よりスポーツ庁、川崎市さんから 地域における障害者スポーツ普及事業を受託いたしまして、障害のあるお子さんたちとの様々な教室を通じてネットワークを作っているところがございますけれど、そんなことでこちらにご推薦いただいたかと思えます。川崎インクルージョンモデルということで、障害者という言葉に僕は大変違和感がありますが、全て一つになってやっていこうということで頑張っております。

今日は実は、島根県の益田市の出張から戻ってまいりました。昨日、萩・石見空港マラソンというのが行われまして、参加をしてまいりました。萩・石見、そして益田市の皆さんからは、自分たちも何らかの形で東京オリンピックに関わっていきたいと、熱い思いを聞いてまいりました。川崎市と益田市はスポーツ文化交流都市として提携を結んでおります。そういったことも含めて先生方にご検討いただけたらと思えます。

(五島委員)

公益財団法人川崎市スポーツ協会事務局長を務めます、五島でございます。東京オリンピックのとき私は高校 3 年でございます、川崎市の生徒会を代表して開会式に参列させていただきました。日本の選手団が入場行進をしているときに思わず涙があふれてきた、そんなことが昨日のことにように思い出されるわけですが、2020 年のオリンピック・パラリンピックでそうした感動の場面を多くの子供たちが感じていただけるようなお手伝いできましたと思えます。また、前にお話しいただいたSELFの菊地さん同様、私どもも多様な人達がスポーツを通して共生できる社会の環境づくりに、スポーツ協会として積極的に応援していきたいという風に考えておりますので、どうぞ皆様がたのお力をお借りしながら環境づくりに努めてまいりたいと思えます。

(島委員)

一般社団法人チャレンジド・クリエイティブラボ代表理事 島でございます。当社団では主に商業デザインの企画運営等で障害者と健常者が協同して一つの作品、仕事を仕上げるといふことを行っており、障害者の方のやる気とスキルを活かした就労支援をテーマにしております。他方、その社団法人の前に衆議院議員の政策担当秘書を務めてまいりました。そこでは障害者支援を含め、女性の活躍支援等、ダイバーシティの分野での仕事を中心に行っておりました。現在その延長線上で、衆参両議院が無党派でおつくりになっておられるパラリンピック成功ワーキングチームというところで事務局のお手伝いをさせていただいておりますので、そちらとの連動で、ぜひ川崎市さんにも、東京都、さらに日本

を支える自治体としてパラリンピックを守っていただきたいと、私どもも微力ながら頑張らせていただきたいと思います。

(杉山委員)

株式会社ぐるなびの杉山尚美と申します。スポーツもアートの分野でも、おそらく食は欠かせないと思っております。そういった領域で委員のほうも参加させていただければと思っております。実際は、川崎市の飲食店様の外国人の受け入れ環境ができているお店がまだ10%にも満たないといった状況があります。が、先日川崎市さんと一緒にやらせていただいたインバウンドセミナーにはたくさんの飲食店様にご参加いただけ、9割以上の方は「もう準備をしていかなければいけない」と、意識は非常に高くなっているのかなという風に思っております。また、バリアフリー対応ができるお店検索ができるようになっておりますが、まだ制度が正しくないかなと正直思っております。インバウンドのそういったものを川崎市から発信できるような、基準になるものを作っていければ、という風に思っておりますので、ぜひよろしく願いいたします。

(田中代理委員)

こんばんは。ピープルデザイン研究所の田中将大と申します。今日は、代表理事の須藤がザルツブルグのフォーラムに呼ばれ、海外におりますので、私が代理で出席させていただきました。

2011年渋谷区で設立しまして、ピープルデザインという、心のバリアフリーをクリエイティブに実現する手法や方法を提唱させていただきながら、川崎市様とは昨年7月にピープルデザインの考え方を活かしたダイバーシティのまちづくりということで協定を結ばせていただきました。現在市内を中心にモノづくり、コトづくり、人づくり、仕事づくり、ひいてはまちづくりということで活動を続けさせていただいております。この委員もされているチッタさん、フロンターレさんなどのご協力もいただきながら、現在力を入れているのが障害者の方々の就労体験で、フロンターレさんには15名くらい働かせていただき、彼らをもてなされる側からもてなす側へということで、その就労体験を着々と続けながら、2020年には川崎モデルとして、強く日本、世界に発信していきたいと思っております。川崎のパラムーブメントでは、そういった就労の部分から私どもの活動がお力になれば嬉しいなと思っております。

(ロー委員)

川崎市のNPO法人を主宰しておりますロー紀子と申します。神奈川県との防災事業をやっているんですけども、今年からの3年、川崎市をモデル地区として要配慮者支援、地域防災の仕組みをつくっていくという取り組みをしております。要配慮者って誰なの、どういう支援が必要なのということが、避難所を運営する方のところまで下りてきていない現状です。いろんな分野の皆さんが「これが必要だ」と言っていることを、合意形成と申しますか、100%ではないけれど、おおかたのところを掬い上げて今の避難所運営に落とし込むことを、A3一枚におこしまして、避難所マニュアルのサブ的なものですね、

たとえばこういう障害がある方にはこういう支援が必要だと思い出していただこうと、今作っております。要配慮者支援という言い方をしておりますが、実際私たちが気づかせていただくことが多いので、ここでもそこで得たようなことを発言できたら良いなと思っております。

(横島委員)

公益財団法人川崎市身体障害者協会社会参加センター事務局長をしております横島と申します。東京オリンピックのときは中学 1 年生で、川崎生まれの川崎育ちなので、川崎球場で、今はなき川崎球場で組体操をイベントとしてやった記憶があります。障害者とひとくりにされても、いろんな障害の方がいらっしやって、いろんな形でスポーツに参加されています。もうすぐ和歌山の身障国体に選手派遣ということで、出発式等々あると思えますけれど、そういう方たち、アスリートの方たちだけでなく、障害をお持ちの市民の方と、障害のない市民の方が一緒にスポーツができるような環境づくりを目指していけたらと考えております。それが 2020 年以降も継続するような形でやっていただければと思います。

(山田委員)

川崎商工会議所、それと公益財団法人川崎市国際交流協会山田と申します。この川崎市、政府、福田市長、このパラリンピックに力を入れられて、このフォーラムを立ち上げられた。私は大変すばらしいと感じました。この川崎を盛り上げて、ひとつ日本全国に盛り上げていきたいなと思います。先ほど大塚さん中澤さんと名刺交換をして話をしておったんですけれども、お体にご不自由がありながら活躍していらっしやる、こういう印象を受けておまして、商工会議所は地域の唯一の総合経済団体でありまして、お体のご不自由な方々の就職とかもって応援したいと考えたところであります。

(北條委員)

川崎市文化財団の北條と申します。今日の名簿の中で「文化」と書いてあるのは私だけなので、少し寂しい気もしています。オリンピック・パラリンピックでは文化プログラムというのがあり、前回のロンドンの時でも「UNLIMITED」ということが文化プログラムの主要な柱でありました。私どもでも、川崎のバリアフリーを含めた資源というのは今どの程度あるんだろうと少し調査をしてみましたけれども、たとえば近々のところで、手話のライブといって手話通訳者が集まりライブをされまして、この前は宮前区で第九を身障者の方が歌うということが、この夏ありました。私どもは音楽や映画の施設も運営しておりますけれど、たとえば映画館では知覚障害者のためには副音声をボランティアの方が入れたフィルムをつくり、あるいは聴覚障害者にはテロップで流す、またいろんなお店では車椅子対応、その同伴者無料とかいうようなシステムをとっておりますけれども、それぞれがまだ点の状態でありますので、今回、文化におけるプラットフォームのようなものを立ち上げ、川崎で一つのモデルケースをつくり、それを県、あるいは大きくあげれば世界へモデルケースとして世界に発信していきたい。当然そこには科学的なものも必要になる。

川崎は今、科学についても最先端医療を含めていろいろやっておりますので、たとえば音楽でも体を動かすことによってどれくらい音階が出るとか、もうそれくらい進んでおりますので、そういうものを取り入れながら新しい動きに参加できればいいかなと思っております。ちなみに川崎市は今、音楽のまちとして一生懸命やっておりますし、あるいは映像のまちとしてもやっておりますので、そういうものとコラボレーションできればなお良いと思っております。

(中村委員)

株式会社フィードの中村と申します。弊社は東京都と神奈川県に会社を置いて不動産業をさせていただいております。マンションデベロッパーとして弊社が日本で初めてじゃないかと思う取り組みとして、40 から 45 平米の 1 LDK ばかりを専門につくらせていただいています。シングル者が住まれる賃貸のマンションは 20 から 25 平米のマンションがよく開発されているんですけど、体がご不自由な方にとって、20-25 平米のマンションではお手洗いや何かから何まで狭いのではないのかというお話をいただきました。40 平米、45 平米を販売している会社では弊社が日本で今一番戸数があるのではないかと自負しておりますので、何かしら今回のお手伝いができればと思い参加させていただきました。

(中澤委員)

バリアフリーカンパニー中澤と申します。会社の名前は非常にベタなバリアフリーカンパニーといいますが、今名刺交換した方はご覧いただけますか、弊社のマークは橋のマークなんです。障害のある人とない人、その間にいろんなバリアが存在する、それを一つずつ解消する橋渡しができればという意味をこめました。

私、車椅子に乗っているんですけども、生まれつきの筋肉の病気だったんですが、15 年前に原因不明の脳内出血を起こして、それから右半身麻痺になって初めて自分の病気がわかった。わかってみたら世界で百人くらいしかしかいない先天性ミオパチーという難病で、がっかりしたんですけど、難病だから治療法はない。それが IPS 細胞の研究対象に選ばれ、ようやく希望が持てるようになった。そこにちょうどオリンピック・パラリンピックが日本で開催されることになって、さらに、皆さんのお話には出てきてないですけど、私にとって今いちばん大事な問題というのが、来年から施行される障害者差別解消法、この法律が日本中に広まるとようやく世界レベルの基準に合致するようになる。オリンピック・パラリンピック、そしてこの法律の施行、これが一気に力を与えてくれる、世界が変わるチャンスなんだと、そんな風に思っております。

私が今までやっているコンサルティングは、いろんな業界のトップ企業に、ハード、ソフト、そしてハートの、いわゆる教育、設計などのお手伝いをさせていただいております。たとえば NTT ドコモさん、金融関係だとみずほフィナンシャルグループさん、変わったところではグーグルのオフィスもうちがコンサルをやっております。一方では、東京都の観光事業の審議委員を、もう 5 期目ですが、ずっとバリアフリー担当でやってきたんですけど、オリンピック・パラリンピックが決まって、その担当でまた任せていただいております。

す。そんな中、川崎市でこんな楽しい企画ができるということで、川崎市のほうでは縁がなかったんですけども、こんなチャンスを与えられたので、ぜひこのムーブメントができるだけ大きな形になるようにお手伝いしていきたいと思います。

(土岐委員)

チッタエンタテイメントの土岐と申します。私どもは川崎の駅前でチッタデッラという商業施設を運営している会社でございまして、チッタデッラの中の映画館とかライブハウスとか、エンタテイメントの事業をやっております。皆さんがここにいらっしゃったとき、玄関の上でっかいカボチャが載っていて、何かかと思ったのではないかと思いますけれど、川崎ハロウィンというイベントがあります。もともと私どもチッタエンタテイメントが19年前に始めたイベントですけども、皆さんにご支持をいただいて年々大きくなって、今年はラゾーナさんですとかミュージアさんですとかも加わり、本当に町全体が一体となったイベントになりました。そういったノウハウといいますか、イベントの経験を、まちぐるみで川崎を元気にするという風に活かせるといいかなと思っております。

(瀬戸山委員)

オフィスプライヤ瀬戸山と申します。私は今年から川崎に会社を移しまして、スポーツに関わる仕事をしております。それ以外にも川崎市のほうで川崎ビーチスポーツクラブという、ビーチバレーのアカデミーとプロのチームを運営している一般社団法人の理事長をさせていただいております。私自身、ビーチバレーというスポーツでアトランタオリンピック日本代表をやらせていただき、その後に監督としてシドニー、北京と経験させていただいております。こんなことを言っていていいかわからないんですけど、オリンピックでは試合が終わると選手はすぐに帰らされるので、パラリンピックを見学させていただくことは今までなかったんですが、オリンピックではパラリンピックにも活用される施設を使うこととなっておりますので、私自身がオリンピックで感じたもの等を、この機会に活かせることができたらと思っております。

(遠藤委員)

まずはじめに遅れて申し訳ございませんでした。遠藤謙と申します。株式会社サイボーグの代表取締役をさせていただいております。この会社は基本的には研究開発の会社で、パラリンピアン、とくに T44 と呼ばれている、膝があるけれど足首がない方々の義足を研究しながら、なおかつ選手たちのチームをつくって、練習をやりながら練習に合うような義足をつくる活動をしております。川崎市さんとは等々力陸上競技場で月一回練習をさせていただいて、たぶんその関係で今回呼ばれたんだと思います。

今回の会に関しては、(企画調整課担当係長)山崎さんが私のオフィスに来ていただいて話したときに、遠回しにお断りしたはずなんですけれども。というのも理由があって、ここで言うと失礼にあたるんですけど、こういった活動はいろんなところにあるんですね。文科省もやっていますし、経産省もやっていますし。我々の活動も経産省からお金をいただいています。我々もミーティングに参加することがあるんですけど、提案することが

「公益にならないからできない」とか、なかなか動かず、結局公益のために公益になっていないような無難な活動、つまらない活動ばかりやっているといつも感じております。ですが、今日は僕は山崎さんの熱意に押されてここに来ました。空気を読めない発言をすることもあると思うんですけど、ぜひ何かやるんだったら、本気になってやりたいと思います。もし僕が邪魔になったら、切っていただいて大丈夫です。

(福田市長)

皆さん熱い思いを語っていただいて、本当にありがとうございました。最後に遠藤さんが言っていたように、かなり尖った方々が多いので、こういうメンバーにお願いしたということに意味があるので、あまり縮こまって無難なことをやりたくないというのが、このメンバーを見ていただいておわかりになったと思います。ぜひ尖った部分を出し合いながら、しかししっかりと前に進んでいかなければなりませんので、ぜひ皆さんのご協力をお願いしたいと思っております。

それではまず、資料1のオリンピック・パラリンピックに向けた本市の取組について、括弧2のパラリンピック推進フォーラムについて、事務局から一括してご説明したいと思います。よろしくお願いします。

(1) 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けた本市の取組について

(2) かわさきパラムーブメント推進フォーラムについて

(佐藤係長)

<資料2～3説明>

意見交換

(福田市長)

それでは、第一回目でありますので、ただ今ご説明させていただいたことに対するご質問やご意見、ご提案などございましたら、ぜひご自由にご発言をいただければと思います。

(遠藤委員)

この提案書みたいなのがありますが、我々はこれを持ち帰り、書いて提出して、次の会合のときにシェアして、これを実施できるかというような話し合いがあると認識しましたが、我々は個別にこれを考える時間があるということですか。

(福田市長)

少しスケジュールがタイトで申し訳ないんですけど。いつまでにご提出いただければ良いでしょうか。

(山本課長)

11月16日までに、提案できる方についてはお願いしたいと思っております。

(遠藤委員)

となると、私は川崎市民でもないの、あまり川崎にくわしくないの、もちろん自分

で調べるとと思いますが、まとまった資料があったらいただきたいと思います。

(福田市長)

ええ、様々な資料がございますので、ぜひ提供させてください。

(遠藤委員)

ありがとうございます。

(中澤委員)

私も今の様式の件なんですけれど、私も市民ではないので、ジャスト・アイディアしかないで、こんな提案書までできるものはないと思うんですね。ちゃんとやろうと思ったら。ただ、テーマとして、「こんな分野でこんなテーマがあるよ」というものは出せるかなど。それがどこにどうつながるか、あるいは市民の活動としてある程度もう動いているところがあるよとか、市の担当者の方からフィードバックしていただければ、後でコミュニケーションを取りながら企画を具体的にできるのではないかと。私は、スポーツ自体はどうかわからないけれど、まちづくりではいろんなことがお手伝いできると思うんですが、こちらが出すテーマに対し、「そのあたりはどうなっているか」という情報をフィードバックしていただいたら、具体的にできるかなと思います。ちょっと項目だけを一枚にして出しますので、「それだったらここじゃないか」と、そういうつながりを見つけていただけるといいんじゃないかと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。提案によって熟度はいろいろあると思います。むしろ、いろいろなレベルの案を出してもらって、そこから適宜ディスカッションしながら、あるいは先ほど申し上げたように実現可能性というものを探りながら進めていきたいと思います。

(中澤委員)

あまりこの様式にこだわらなくていい？

(福田市長)

はい。むしろ、こだわらないでください。

(中澤委員)

ありがとうございます。

(ロー委員)

先ほど皆さんのお話を聞いていて、提案させていただくにあって、あちらと一緒にご提案できたというものがあるんですが、やはり11月の〆切まではそこまでの時間がないですけれど、一方的なリクエストで「ここと一緒にやれたら」というのを書いてしまってもいいんですか。

(福田市長)

ぜひ。

(ロー委員)

それは、また向こうに希望を伝えていただけると理解しました。

(福田市長)

はい。ご質問だけでなく、どうぞご意見もいただければと思います。このかわさきパラムーブメントですけれども、市民の気持ちにアプローチしながら、という風な形で言っているんですが、市民の気持ちの劇的に変わるといのは、なかなか難しい。むしろ意識が変わるよりも、何か具体的に事を起こして、そこから意識が変わるとい、そういう順序なんだろうと思うんです。ですから、具体的に何かをどんどんやっていくということになるかと思しますので、ぜひ具体的なアイデアを寄せていただければと思っております。中森さんいかがですか。

(中森顧問)

個々のテーマでいろいろありますけれど、従来から川崎のことでいろいろお話をさせていただいて、やはり川崎が日本で初めて取り組んだという、そういうものを幾つか並べていきたいというのがあって、そのうちの一つは身体運動の日常化、早く皆さん体を動かす習慣の重要性を理解して、つけてほしいなど。それをつけるための手段の一つとして、従来からある伝統的な文化、一番はお祭りとか季節の行事とか、そういったところで地域の人たちが障害者も含めて一緒に体を動かすと。一緒に体を動かす場所をつくりながら、体を動かすことの重要性を学んでいくということが、一つあるかと。

高齢化に向けては、三世代で楽しめるようなイベントをつくってほしいなど。三世代で楽しめるような文化というのが日本にあまりないので、そういうものとあわせて住環境、ホテルもそういう風になればいいのかな。30年先になったら、そういう風になると。

核家族化でどんどんプライバシーが守られて、その分、人に干渉しない、反対に自己主張を押し通す人がいっぱい増えてきて。今日も心のバリアフリーという人間関係を良くするような働きかけが求められていますけど、その反面、そういうものが進んできているのかなあと。三世代で体を動かし楽しむことは、そういう意味でも重要ではないかと。

もう一つが防災という観点で、大津波が来たときに川崎でどうやって人が守れるのかという問題。やはりスポーツ施設と商業施設と公共施設、学校も含めて、高い位置にまとめてつくるような構想もアイデアとしてあるのかな、と。大津波になったときに守れるような施設づくり、住環境づくり、まちづくり。そんな観点からこれを書きたいと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。この会議は親会議みたいなことになるので、中森顧問からお話いただいたように、かなり多岐に分野が渡るものですから、具体的な取り組み・検討は分科会方式でそれぞれ細かくつめていくというやり方をさせていただきたいと思います

(瀬戸山委員)

すみません、資料にある東京大会の競技会場、これ、オリンピック競技ですよ。パラリンピックはすべてあるわけではないです。パラリンピック競技は、どれに入っていますか。

(中森顧問)

すみません、1 ページをご覧ください。資料2の1 ページですね。オリンピックの競技

が載っています。そのうち、ボクシング、ハンドボール、ホッケー、競泳のマラソン、飛び込み、シンクロ、近代五種、ゴルフ、レスリングは、パラリンピックでは行われません。ここにはない、ゴールボール、ボッチャがプラスされます。

(成田委員長)

バドミントンとテコンドーは東京大会からということです。

<2020年東京大会 パラリンピック競技種目>

- 陸上競技
- サッカー（視覚障害者5人制サッカー）
- 卓球
- 柔道
- パワーリフティング（オリンピックのウエイトリフティングに該当）
- バレーボール(シットティングバレー)
- テニス
- トライアスロン
- 競泳（マラソンを除く）
- 馬術
- ボート
- パラカヌー
- アーチェリー
- バドミントン
- ラグビー（ウィルチェアラグビー）
- 車いすバスケットボール
- 射撃
- 車いすフェンシング
- セーリング
- 自転車競技
- テコンドー
- ボッチャ
- ゴールボール

(福田市長)

障害者も健常者も混ざり合っていくということではピープルデザインの考え方から何かご意見ありましたら、田中さんの何かございますか。

(田中代理委員)

そうですね。先ほどお話に出た三世代が楽しめるイベントとか、文化、お祭り等といっ

たお話があったんですけれども、ちょうど先週、私ども渋谷区のほうで、神宮前というところをバス通りも含めて歩行者天国にしまして、小さいお子様から高齢者、障害ある方まで楽しめるイベントをやりまして、3回目で5000人くらい来場していただいたんです。昔ながらの道路に落書きをしたり、最後は三世代集まって東京音頭、渋谷音頭で締める、みたいなイベントです。今お話をうかがって、先ほどお話させていただいた就労体験といったことの他にも、地域を巻き込んだストリートイベントも、ちょっとエッジのきいたカッコいい感じで表現できればいいのかなと、今ちょっと思いました。

(福田市長)

ありがとうございます。先ほどちょっとご紹介した、アンプティサッカー。アンプティサッカー自体はパラリンピックの競技ではないですけど、障害者の人たちのスポーツという感覚だけではなくて、見ている人たちも一緒に楽しんでもらうという、そういういい機会になると思っています。全日本の大会をこの川崎で4年間ずっと続けております。今回も「川崎にみんなで行こう！」と全国のチームが頑張ってくれているので、こういった機会に、混じり合っていく世界を市民の皆さんに見ていただくことは大切だと思っています。

(瀬戸山委員)

オリンピックのときに海外に出て感じるの、その国が、まちが、まちをあげて歓迎してくれる。非常に尊敬していただいて、非常に気分よくプレイができる。また声援が自分たちを後押しをしてくれるんですね。たぶんパラリンピアンの方も同じだと思うんです。そう考えると、オリンピック・パラリンピックのとき、とくにパラリンピアンの方の選手の方がやっていることはすごいことだと感じるのが大事なのかなと。そう考えると、いろんな子供たち、いろんなボランティアの方に、「日々練習・修練を重ねないと、それができないんだ」と感じる体験をしてもらうことが、パラリンピアンを迎えるときに大事なことかと。また、それをパラリンピック前に経験させて、ボランティアをどう育てるかが、一つのムーブメントをつくる上で大事なのかなと、私なんかは海外の経験から感じます。そういったものを一つのテーマにするのも良いのではないかと思います。

(中澤委員)

私もパラの選手については、以前、大日向（おびなた）さん（記録者注：チェアスキーの大日向邦子選手）と海外に行ったとき、彼女がゴールドメダリストだとわかると、オリンピックの選手と同じように、現地の人たちの反応がまったく変わるんですね。けど日本ではパラリンピックは、パラリンピックというものがスポーツとして国民の中で認知されていないですよ。やっぱりそのへんのところから、スポーツもそうだし、障害のある人自身が意識されていない。人間として、まだまだ日本の社会で認知されていない。

たまたま旅行会社の全部の研修をやっているんですけれども、障害のある人との距離感をすごくあるように感じている人が圧倒的に多いですよ。これを一歩変えるだけですが、変わってくるんですけれども。会社もいろんな企業がある。でも、川崎では社員がみんな

変わっていく。全国規模の会社でも、本社ではなく川崎から広がっていく。世界を助ける、支える企業のあり方。川崎がそんな見本になるようなことも大切かな。それと並行して、2020年パラリンピックに向けて応援し、選手を育てて送り込もうということが、市民みんなの思いになっていく。そういう流れをつくっていくことが大事なのかなと。

ここに来ていらっしゃる皆さん、それぞれ頑張っているんですけど、なかなか巻き込みきれない部分があると思うんですよね。そこをどうやって変えるか考えながら、具体的なアクションをどう起こしていくか。まずは現状の認識から始めないと、始まらないかもしれない。そんな風にちょっと思いますね。

さっきの障害者差別解消法についても、日本って国連で障害者権利条約を批准したの、世界で141番目なんです。一番遅れているんです。それを意識して、市民に世界の中の様々な状況を、世界の中で日本はどうなんだ、パラリンピックって世界でどうなっているんだと知っていただきたい。

パラリンピックも、日本のパラの選手と海外のパラの選手の置かれた環境って、まったく違うんです。国の行政についても、ようやく文科省の管轄になったばかりです。それまではスポーツではなく、リハビリですもんね。それが日本の今の問題だっていうこと、そういう状況だっていうことが知られていない。そういう認知のための教育とか、啓蒙活動も一緒にやっていけるといいのかなと、そんな風に思っています。

(成田委員長)

今お話を聞いていて、まったく同感だなあと思ったんですけど、実は私、先週の金曜日に川崎市立南野川小学校という小学校の4・5・6年生に講演会をしたんですね。時間の都合上、泳ぐ映像も見せていなくて、ただ私の話だけで90分終わったんですけど、たまたま昨日の日曜日、南野川小学校の子供たちが歩いて15分くらいの横浜国際プールでサクラマスターズだったんです。金曜日に私が健常者と混じって泳ぐんだよという話をしたところ、昨日15人くらい子供たちが応援に来てくれて、プールサイドで、「成田さん、頑張っ！」という声援を送ってくれたんですね。まさにそれなのかなって。見てもらって、ふれあってもらって、知ってもらおうこと。水泳というのは誰が見ても一番二番三番とわかるので、この子供たちはたぶんパラリンピックのことも知ってくれたし、成田真由美という人のことも知ってくれたし、泳いでいる状況も生で見してくれた。事前にも授業をしてきていたので、たぶんその子供たちはパラリンピックのことを忘れない。

そういうイベントをイヤっていうほど川崎市内でやってもらって、「またあるの？」でもいいので、子供たちとふれあって、何か感じてもらえる機会をたくさん与えられたらいいなと思いました。

(ロー委員)

ずいぶん昔になるんですけど、たまたま見かけた手話が表現として美しいというか、惹かれるものがあったって学んだんですけども、当時手話を使う人との交流の場がありませんでしたので、学んでいくモチベーションが持たなくなって、使う機会がないまま忘れてい

ったんですけれども。ふれあうきっかけや、継続させていく機会として、同じ場に集まるということは大事なのかな、と。

もう一つボランティアということで考えると、香港に住んでいたことがあるんですけれど、向こうと比べると日本はボランティアの敷居が高い。要配慮者支援のお話をしているときも、「支援」って付いてしまうと、すごく立派なことを成し遂げないといけないというか、「私なんかがお役目に立てるでしょうか」みたいな姿勢になってしまって。海外でボランティア活動に関わっていると、もうちょっと気楽な感じというか、「何か困っているなら、助けようか？」と、役に立つ・役に立たないみたいなものをあまり感じていないと言いますか。今回提案をさせていただこうと思っているのも、ボランティアに対する意識を取り組みやすいものに、一緒に何かに取り組むことでお互いを知るようなものにしたいと思っています。

(福田市長)

先ほどからボランティアの育成という話が出ていますけれど、もっとカッコよく楽しくという意味では、土岐さん、それから小倉さんにもお話を聞きたいです。

(土岐委員)

質問の答えに全然ならないんですけど、うちのチッタデッラの中の通りは、イタリアをテーマにした商業施設なので、石畳のデコボコ道だったんですね。「理想的なステキな町並みができたね」なんて我々は思っていたんですけれども、結構評判が悪くて。実はハイヒールの女性にもものすごく怒られました。あと車椅子やベビーカーが押せないっていうお叱りもずいぶんいただいて、他にもいろいろあって、石畳の要素を残しつつも歩きやすい平らな通りに、いろんなところの協力をいただいてなったんですけど、その前にピーブルデザインの須藤さんにその話をしたことがあったんです。そしたら須藤さんは、「石畳、結構じゃないですか」とおっしゃって、「石畳が悪いんじゃないくて、石畳で困っている人がいたら、それを普通のこととして周りにいる人が押してあげるとか手伝ってあげるとかいう世の中にしたいね」と、そんな話だったんです。「ボランティアをするのは特別なことじゃない。っていうことを、もっとみんなが自然に意識する世の中にしたい、だから石畳を平らにするんじゃないくて…」と須藤さんは言うんです。それを聞いて、「あ、すごい深い話だな」と思って。

インフラもちろん大事です。けれども、やっぱりもっと意識の問題のほうが大事。ボランティアをするのは特別なことみたいじゃない世の中を、どうやってつくっていいのかな、っていう話だと思います。僕らエンタテインメントをやっている企業が、どうやって具体的にお役に立てるかという、なかなか難しいと思って聞いておりました。

(中澤委員)

もともと日赤のボランティアをやっていて、日赤の語学奉仕団という障害のある人に向けて、とくに海外から来る人への語学を使ったサービスを提供するところでボランティアをしていたんですけど、まずはボランティアっていう文化が日本ではまだまだないので、

ボランティアで提供された能力やサービスが社会的に、地域社会をはじめ、社会で評価される環境をつくっていくことからじゃないかと。

ボランティアは敷居が高いということでしたが、あまり形から入らないで、普通の、当たり前と一緒にいる人たちだとみんなが気づき、お互い助け合い、そんなところから広めるのがいいかなと。さっきの石畳も、「ちょっと歩きにくいよね」と平らにする方法もあるけれど、「あの石畳ステキだよ」というまちで、地域の人同士がコミュニケーションをとって、みんなが幸せに暮らせるような環境をつくっていく。ここはそういう形の始まりの会になると、そういう風に思っていたらいいと思うんです。

ムーブメントのきっかけをつくるとなると、最初からスポーツをどうこう、となる。それも大事なんだけど、もっと大事なのは人と人のつながり、まさに橋渡しができるようなムーブメントを起こせれば、みんな参加したくなるんじゃないかと思っています。

(大塚委員)

石畳の話でいえば、僕も中澤さんがおっしゃる通り、「あそこはステキだね」と言えるようになりたいと思っていますし、実際海外に行かせていただいているときに、石畳はいいと思ったんです。カッコいいですし、オシャレですし、歴史的建造物があったところに、いきなりスロープがあるのもちょっと興ざめするな、という風に思います。今デコボコ道を通れるような最先端のモビリティもありますので、そういったものをシェアリングできるような環境をつくるとか、私自身ウィルというパーソナルモビリティのユーザーでもありますけれども、今日は乗っていないんですけれども、そういったものをシェアリングできる環境をまちにつくるとか、そういったことでもバリアを乗り越えられるのではないかと思うんですね。

4-5年ぐらい前にWHOと世界銀行が、当時約70億人の世界人口のうちの15%の方、約10億人が何らかの障害を持っているという統計を出したんです。15%は、今ここににいる方々も、その割合でいる状況です。何ら特別なことではない。ましてや私のような車椅子ユーザーは、全国で200万人いるといわれておりまして、これ、講演させていただくときに毎回お話しするんですが、全人口の1.57%なんです。そうすると、200人の方とすれ違ったら3人の車椅子ユーザーの方を見かけるはずなんです。でも、皆さん今日いかがでしたか。たぶんお見かけすることはなかったと思うんです。

実は200万人という数字、ちょっと置き換えると、佐藤さんという苗字の方と同数なんです。佐藤さんが199万人いて、車椅子ユーザーが200万人いる。スマートフォンを見ればアドレス帳の中に、佐藤さんがいっぱいいらっしゃると思うんですが、車椅子ユーザーの方がアドレス帳に入っているかといえば、入ってなかったりする。それはどういうことかという、車椅子ではまだまだ出られる状況ではない。情報が足りない、ハード面が整っていない、また、言い方が悪いですけど、びびっているとか。

外出を生み出すのは、我々が欲しがっている情報、正しい情報が出るということでもありますので、ぐるなびさんのほうでもいろいろやっていただきたい。バリアフリーのお店

などの情報がより多く出ることによって、社会参加、就労、納税というところにまで導いていけるのではないかと考えています。そういったものを川崎市から、ムーブメントとして起こしていければと考えています。

(福田市長)

第一回なので、アイスブレイク的な要素もありますので、まだお話をされていない方があれば、もしよろしければ一言ずつでも。

(島委員)

先ほど申しました国会議員の 2020 年パラ成功ワーキングチームでは、当日の観客席を満員にするということをゴールに掲げています。それが非常に難しい現状を覆すために、4つテーマを掲げています。1つはもちろん選手育成、そして環境の基盤強化、ムーブメント、そしてレガシーと。そのうち選手育成や基盤は、委員会や組織委員会あるいは JOC 様、IPC 様、皆様そのところは非常に積極的に展開されているんですけど、やはりムーブメント、レガシーということを誰がどうやってつくっていくのか。市長様がおっしゃられたように、ムーブメントは市民の意識改革ということで、これは具体的に市民のそれぞれのレベルで入りやすい入り口をつくって、ムーブメントを自分のものとして感じていただけるような場面を提供していかなくてはと思っています。

先ほど成田さんがおっしゃったような教育現場での選手との直接的な出会いも大切ですが、教育現場にいない方、あるいはもともとスポーツに興味のない方を、どのような場でパラリンピックと結びつけていくか、具体的な事例の中でムーブメントをつくっていく必要があるのかなとも思います。中森さんがおっしゃられたように、たとえば障害者、健常者関わらず身体運動が日常化していく。日常化からレガシーというものが一つ一つつくられていくのかなと。スポーツがそうであって、施設整備もそうです。2020 年だけの整備でなく、施設をつくるコンセプトの中にパラリンピックで学んだ障害者との共生社会という考えが日常化していくことがレガシーにつながっていくと思いますので、具体性と、川崎市の持っているポテンシャルをもって差別化をしながら、中長期のゴールをつくり、何をやって何につなげていくという話をそれぞれの専門分野の中で切り分けながら、全体としてムーブメントをつくっていくのが望ましいのかなと考えています。

(福田市長)

オリンピックムーブメントとしては文化だとか、いろんな要素があると思うので、JOC のお二人からもなにかコメントすることがあれば、お願いできればと思いますが。

(中森顧問)

JOC のほうの中森と申します。全体の方向としてお伝えしておかないといけないことがございまして、来年の 2016 年のリオデジャネイロの前に、大会組織委員会はレガシー・アンド・アクション・プランというものを出します。2020 年のオリンピック・パラリンピックをどのように具体化していくかのプランを、国の方向性を見ながら、都の政策を見ながら、大会組織委員会でつくるわけでありまして。議論が今も続いておりますので、その方

向性を見ながら、3月に推進ビジョンを策定・公表というスケジュールになっており、川崎市のほうが若干先行するわけです。私どもも情報提供させていただきますので、ぜひその流れに沿って、立案していただけたらと思います。

あと、国際オリンピック委員会から、2020年のオリンピック開催にあたって、単にオリンピックをやるということだけでなく、そのオリンピックがその都市、国、各地方都市にどのようなインパクトを与えたかというレガシー評価をなさいと求められております。先ほど慶応大学がその受託をしまして、大会が終わった3年後までは義務として行っています。それはオリンピックを開催した都市に課せられた、オリンピックをどのように活かすかという義務だと思えます。川崎市もぜひこのプロジェクトをサステイナブルな、2020年を越えて広く市民に還元されるような、ぜひ違う形でも発展して、新たな川崎市のレガシーを2020年をきっかけにつくっていただけたらと希望を述べさせていただきます。

(福田市長)

ありがとうございます。今、まさにJOCの中森さんからおっしゃっていただいたように、先ほどもちょっと説明しましたが、9年後の市制100周年に向けてどんなまちを、どんな人をつくっていくか、そういう中で5年後のオリンピック・パラリンピックを一つのメルクマールとして、一気に進めていこうというプロジェクトです。オリンピック・パラリンピックが終わってしまったら終わってしまうという話ではまったくないので、その先を見据えてやっていきたいと思っております。時間もだいぶ来ておりますので、成田共同委員長から総括的にコメントをいただきます。

(成田委員長)

これからまたいろんな意見が出てきて、議論が始まると思うんですけど、今よりも明日へ、明日よりもあさって、みたいな毎日毎日の積み重ねが大事だと思っています。昨日を振り返らないで、もっともっと住みやすいまちになる。私が車椅子になったのは30年以上も前なので、それはそれは住みにくくて。でも、今はインターネットが普及して、行きたいところがあれば、エレベーターがあるかインターネットで調べられる世の中なので、だからこそもっともっと何か変わるんじゃないかと思っていますので、ぜひ皆さん、たくさんのご意見をお願いしたいと思います。

その他

(福田市長)

それでは、第一回目で、こういうメンバーでやっていきますよということでありましたので、これから具体的な取組をぜひアイデア出ししていただいて、取組提案票をモデル的に出させていただいておりますけれど、この形式にとらわれず、どういう熟度でもけっこうですので、ご自身の関係しているところで、ご提案をいただければと思っておりますので、よろしく申し上げます。さきほどロー委員からおっしゃっていましたが、こういう団体と組みたいというようなものも、あまりとらわれることなく書いていただければ

ばと思います。よろしくお願いします。

それでは、その他といたしまして、事務局から何かお話がありますか。

(山本課長)

はい、ただいま市長からお話がありました取組提案票の件でございますが、今の議論を踏まえますと、こちらの様式にはこだわらずに、既存の資料を提供していただくことも可能ですし、あるいは取組票に沿ったものを作成していただくことも可能です。また、これは必ず出していただかなくてはならないというものではございません。可能な範囲内で、11月16日までにいただければ、それをベースに今後の分科会につなげていきたいと思えます。

また、後日、分科会等の日程とあわせまして皆様のほうにEメール等でご照会をさせていただきたいと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。こちらからは以上でございます。

(福田市長)

川崎の今の現状ですとか、こういうバックデータが必要だということがあれば、なんなりとおっしゃっていただければと思います。

それでは議事はすべて終わりましたので、進行を事務局に戻します。

(山本課長)

長時間にわたりましてありがとうございました。これでかわさきパラムーブメント推進フォーラム第一回推進会議を終了させていただきます。皆様どうもありがとうございました。

閉会

以上